自称映画評論家による映画評

徒然正志

「英国王のスピーチ」

コンプレックス。誰にも理解できない、自分の中の苦しみ、悔しさ、自分との戦いにさらされる。その当人は、大英帝国の王子、一般平民とは苦しみの濃度が段違いであろう。威信と威厳を常に求められ、それができて当然と言われる世界の中で彼は生きている。想像しただけ彼の苦悩の深さが推測され、その苦悩が映像になり私の眼前にさらされるのだ。

彼の苦悩を何とか矯正しようとし夫婦が一体になり、医師と知り合い、大英帝国の王子と平民の医師が対等の立場でタッグ組む。この状況は、平民と王子の地位の隔絶を払拭したことは、時代性を考えてありえない出来事ではなかったのではなかろう。それゆえ、平民の医師が求めた同等の立場を認めた王子の態度から、二人の信頼関係の強さを感じることができる。対等の立場を認める過程に二人の戦いが、静かな展開の中で強烈な二人のやりとりから迫力をもって映像化される。話すというアクションの少ない行為を迫力をもってスクリーンを覆ってしまうのが、この映画の核心になっているのだ。

愛国心。大英帝国の王子が持つ自然な感情と自分のコンプレックスを秤にかけても、王になる決意をした行為自体が彼の心の強さを感じる。自分がどんな醜態を全世界にさらすことになってもだ。この行為は現代においてリスクを回避する風潮から言って、コンプレックスを背負っても帝国を守るという彼の決意の強さが人間の強さとなって伝わってくる。

ラストシーンの第二次世界大戦に向けたスピーチ。ラジオで話すという静かな展開の中で激烈な自分との戦いが始まるのだ、それも親友と共に。マイクの前で懸命に話す彼とマイクの後ろに立ち無言のジェスチャーでサポートする友。このシーンにおいてのカメラのアップ、引いたアングルが物凄い迫力を持つのだ。ただ話すという行為のシーンの緊張感の中で胸をえぐられる感動に浸った。自分のコンプレックスに果敢に挑み全世界から喝采を受ける、彼、ジョージ六世に私は本物の勇気を見た。この勇気が世界を支え、自分の困難と戦った人を英雄と言うのであろう。この静かな、そして迫力を持って英雄を映像化したキャスト、スッタフに万感の拍手を送りたい。